王陽明の江西時代における「思歸」をめぐって

劉　珉

一、はじめに――江西時代の位置づけ

王陽明（一四七二～一五二九）の思想と言えば、まず「心卽理」を思い浮かべることが多いであろう。晩年に唱えられた「致良知」説なども有名であるが、それらは結局、「心卽理」の時點で用意されていたものであり、「心卽理」こそが「陽明學の眞髓」[1]であるとする傾向が今も強いように思われる。ただ注意すべきは、龍場の大悟で「心卽理」を悟ったとき、陽明はまだ三十七歳であり、その後の人生に二十年もの歳月が殘されていたことである。聖人を目指して一生努力し續けるならば、二十年の間に、思想の骨格は變化しないまでも、その骨格に肉付けがなされ、思想的成熟が促されることもあるのではなかろうか。そこで、龍場以降の陽明の思想的成熟を問題にするとき、我々はまず、その學説の決定版に位置づけられる「致良知」説と、それが形成された陽明の江西時代（四十六～五十歳）に目を向けるべきであろう。

陽明の江西時代は、正德十二年（一五一七。なお本論の敍述は正德末期の數年間に集中するため、以下年號と西暦はなるべく省略する。）一月に、都察院の左僉都御史として、江西の贛州に赴任し、南贛巡撫という職に就いたことに始まる。宸濠の亂以後は、江西巡撫を兼ねたために、赴任先が省城の南昌に移ったが、最終的に江西を離れる十六年六月までの計四年半、地方の最高長官である巡撫（または提督）として江西に滯在した。陽明が「事上磨練」を説くことはよく言われるが、實は

その陽明でも、この時になって初めて巡撫のような重大な「事上磨練」の場を得たのである。江西時代において、陽明は軍事、民政にわたって數々の功績を擧げたが、同時に政治的には危險な立場に追い込まれ、辛酸をなめ盡くした。陽明が軍事について、「因兵事紛擾、賤軀怯弱、以此益見得工夫有得力處」（「與薛尚謙」三、『文錄』一）と言うように、戰爭をはじめとするこの時期の「事上磨練」が、彼の「工夫」（修養のための努力）を問うことになった。そしてまさにそう問われた結果、江西時代の終わり頃に[2]、かの「致良知」說も形成されるに至ったのである。本論はすなわち、「致良知」形成の背後にある、江西時代における陽明の事上磨練の工夫と、その工夫によって促された思想的成熟を問題にする。

ところで、この江西時代を從來の研究はどう見ていたのであろうか。主に二つの見方が擧げられる。一つは「致良知」の形成に關するものである。これについては、弟子の錢德洪が編纂した陽明の『年譜』に「自經宸濠忠泰之變、益信良知眞足以忘患難出生死」（五十歲）とあるため、從來の研究もほとんどそれを踏襲し、致良知が形成されたのは宸濠の亂とそれに續く張忠・許泰の變を經驗したからであると說明する[3]。ただ問題は、致良知という新しい行動原理が形成される說明として、單に患難を經驗しただけではまだ不十分なことであり、その患難にどう對處したかという主體的對應まで含めて初めて十分な說明になると考えられる。もう一つは、陽明の目覺ましい功績に對する注目である。『明史』列傳が一卷すべてを陽明の靖亂の敍述に費やし、また『王陽明先生出身靖亂錄』という小說もあるように、その事績は早くから人口に膾炙していた。現代の傳記研究もそれと同じく、いつも大幅な紙數を割いて陽明の戰爭指揮を敍述しているが、ただそのような見方は、實は陽明の成し遂げたことのいわば外側を捉えただけのものであって、陽明がどのような內面的努力を通してそれを成し遂げたかに關しては立ち入っていない。そうするよりも、江西期における陽明の工夫と思想的成熟を見るには、やはり陽明自身の視線に沿って、彼がどのような問題に直面し、それにどう對處していたかを見る必要があろう。

それでは、陽明自身の視線に沿って江西時代を見れば、何が見えてくるのであろうか。それは恐らく、この時期を一貫する陽明の主觀的特徵、「思歸」ではなかろうか。その四年半において、陽明は八回以上も上奏文を奉り、歸鄕（致仕または一時の歸省）について皇帝の許可を願い出ていた。それと同時に、中央での人脈を利用して朝廷の重臣や自分の友人に

も多くの書簡を寄せ、歸鄉の許可について協力を要請していた。それでもなお歸鄉の許可が下りないなか、陽明は職を投げ出して逃げ歸る思いすらたびたび起こしていたという。では、陽明はなぜそこまで故鄉に歸りたいと思うようになったのか。せっかく國家のために忠を盡くし、民にも直接福祉をもたらすことができる巡撫という地位に就いたのに、なぜその地位をあえて放棄して歸ろうとしたのか。また、結局は次の嘉靖帝が卽位するまで歸れなかったのであるが、その歸りたくても歸れない狀況のなか、陽明は物事にどう對處していたのか。さらに、それが「致良知」の形成とどう關連していたのか。要するに、本論は陽明の江西時代における强烈な「思歸」を手がかりとして、その工夫と思想的成熟を考察しようとするものである。

二、「思歸」とそれを募らせる事情

そもそも思歸というのは、陽明一人に限った感情ではなく、出身地にだけは赴任することのできない中國士大夫に、ある程度共通する心情である。[4] また、陽明の思歸も江西時代に始まったわけではなく、龍場以後から抱き續けてきたもののようである。ただ、江西時代は陽明の生涯を通じて思歸が最も激しかった時期と言えるのであって、それにはそれなりの事情があったのである。

今まで陽明の思歸に注目した研究は非常に少ない。管見の限り、左東岭氏の論文「王陽明歸隱意識所體現的人生存在論價値」（錢明・葉樹望編『王陽明的世界』浙江古籍出版社、二〇〇八）が擧げられるくらいである。そこでは、陽明の思歸の理由を、消極的には仕官に對する畏怖や嫌惡を持っていたからであり、積極的には仕官しなくとも、彼には天下を救う別の、しかもより效果的な方法があったからであるとする。その方法は何かというと、すなわち弟子と講學して道を明らかにし、人々の良知を呼び覺ますことである。その論證では、重要な根據とされた「思歸軒賦」などが『全書』の誤った書簡年代に從ったために、一部通らないところもあるが、全體の論旨には筆者も贊同する。また、同樣の論旨は、實は余英時氏も明代政治文化に關する論考で別の角度から指摘している。[5] 余氏は、明代の士大夫が置かれた政治環境が險惡なものであることを指摘したうえで、龍場以降の陽明について、やはりひたすら官界から退こうとする消極的な面と、直接各個人に訴えかけて人々の良知を呼び覺ますことで天下を治めようとする積極的な面を摘出した。この二面は陽明の思歸に確

かに存在するが、ただ思歸の事情は、それよりもっと複雑なように思われる。

(1) 病と思歸

陽明の思歸には、まず次第に悪化する病のために、職務の壓力から解放されて療養に努めたいという思いがあったと考えられる。陽明には持病があり、生涯それに苛まれていたことは、周知の通りであるが、その病が特に進行したのが江西時代であった。

例えば、「賤軀患咳、原自南贛蒸暑中得來」（「與黃宗賢」三、『外集』三）と南贛の氣候で咳を患うことになり、それで客と會談するときに、「忍咳與談、談劇復咳、咳止復談」（「簡歐陽南野崇一」、『東廓鄒先生文集』五）と咳き込む様子も傳えられている。また、山奥に巣くう山賊を討伐するとき、「因賊巣瘴毒、患瘡癘諸疾(6)」と山間の瘴癘に冒されて全身に腫れ物ができ、しかも「風毒大作、壅腫坐臥、恐自此遂成廢人」（「與顧惟賢」三、『續編』二）というところから、その腫れ物は相當な疾患であったことが分かる。さらに、正德十五年になると、陽明は自分を巡撫に抜擢してくれた兵部尚書の王瓊に、

日來嘔血、飲食頓減、潮熱夜作、自計決非久於人世者。（「與王晉溪司馬」十三、『續編』二）

と述べ、病がすでに喀血するまで進行し、恐らく餘命が長くないという自覺もあったことを語っている。

そのような健康狀態のもと、職務の遂行も日頃の修養も、格段と難しいものになっていたに違いない。後年、このような病中の工夫に關して、陽明は次のように振り返っている。

爲學功夫最難處、惟疾病患難。患難中意氣感發、尙自振勵。小痾薄瘥、猶可支持。若病勢稍重、精神昏憊、又處羈旅、卽意思惝怳無聊、鮮不弛然就縻者。此皆區區嘗所經歷、不識賢者却如何耳(7)。

工夫が最も難しいのは、ただ病と患難の時であった。そのうち患難と輕い病はまだ何とか頑張れるが、重い病を患いしかも異鄕の地に身を置くとなると、工夫はなかなか維持し難いものであると陽明は言う。最後に「此皆區區嘗所經歷」とあり、みな自分が經驗したこととしているので、恐らく江西という異鄕の地に身を置いていた時のことを言うのではなかろうか。要するに、江西時代における陽明の重い病は、その職務の遂行や自身の工夫にとって大きな障害となっていたのであり、この時期の陽明の判斷や行動には、すべてこの前提條件が横たわっていたのである。

(2) 肉親と思歸

次に、陽明の思歸の中核をなすのは、やはり肉親つまり祖母と父親に對する想いであったと考えられる。陽明にとって祖母と父親がいかに大事な存在であったかについては、若い頃に、佛教や道教への耽溺から目覺めたエピソードがそれをよく示している。『年譜』三十一歳の條に次のように言う。

已而靜久、思離世遠去、惟祖母岑與龍山公在念、因循未決。久之、又忽悟曰、「此念生於孩提、此念可去、是斷滅種性矣」。明年、遂移疾錢塘西湖、復思用世。

すべてを斷ち切って世を離れようとしていたら、祖母と父親への想いだけはどうしても斷ち切れなかった。そこで發想を逆轉させ、この想いは生まれつき持っているものであり斷ち切ってはならないと肯定し、さらにそれをもとにして世間にも身を投ずるようになったという。ということは、祖母と父親は陽明のこの世に對する最後の未練であるとともに、陽明が世の中で働いていく原動力にもなっていたと言えよう。

陽明は十代に母親を亡くしたが、その代わり祖母によって可愛がられてきた。江西へ赴任することになったとき、その祖母はすでに九十七歳であった。そのため、陽明は祖母を最後まで見守りたかったが、やむを得ず江西への道に就くと、早く仕事を終わらせて歸ろうという思いになった。正德十三年三月、山賊討伐の任務が一通り終わると、陽明は立て續けに辭職の上奏文を奉り、何とかまた祖母に會えるように努力していた。ところが、その願いはとうとう叶わず、この年の十月に祖母は亡くなり、翌年の一月二日に陽明のもとに訃報が屆いたのであった（「寄希淵」四、『文錄』一）。

祖母が逝去すると、今度は父親が辛い目に遭うことになった。というのは、父親もすでに七十代であり、その年齡で親を亡くす痛みを受けると、命さえ危ぶまれるものだったからである。そのためか、『禮記』曲禮では七十代の服喪について、「七十唯衰麻在身、飲酒食肉處於內」と墓の側に住む必要はなく飲食も普段と同じ通りで、ただ喪服を身に付けていればよいことを規定している。しかし、陽明の父親は禮の規定を破ってまで服喪を强行し、墓の側に住むことにした。そして、それが後に陽明の心配の種となり、叔父に對する書簡では、陽明も『禮記』のこの規定を引き、何とか說得して父親を家の中に住まわせてほしいと懇切に賴んだ（「又與克彰大叔」三、『續編』一）。

祖母の逝去とほぼ同時期に、陽明は贛州の役所で改修工事を行い、その中で故鄕の山麓を彷彿とさせる一角に部屋を設

け、「思歸軒」と名付けた。[8] 十四年三月、陽明はその思歸軒を記念する文章「思歸軒賦」を作った。[9] その中で、弟子の意見という形で三つの歸郷理由が擧げられたが、陽明はそれらをすべて否定して、ただ「吾親老矣、而暇以他爲乎」と、親が年老いた以上、ほかに何事もする暇のないことを強調する。その末尾に、陽明は

歌曰、「歸兮歸兮、又奚疑兮。吾行日非兮、吾親日衰兮。胡不然兮、日思予旋兮、後悔可遷兮。歸兮歸兮、二三子之言兮。」

と詠い、日増しに衰えていく父親が自分の歸りを待っているのに、なお歸ることができないやましさを表わしている。

すると、まもなく明一代の大事件であった寧王宸濠の亂が起こり、陽明もそれに巻き込まれたが、息子が國難に巻き込まれた知らせが父親のもとに屆き、服喪中の父親をいっそう苦しませた。そして、心配で病にもなったという。亂が收まり、年來の思歸と父親に對する心配を胸に抱き、陽明は兵部尚書の王瓊に歸郷の許可を次のように懇願している。

生（陽明）始懇疏乞歸、誠以祖母掬育之恩、思一面爲訣。後竟牽滯兵戈、不及一見、卒抱終天之痛。今老父衰疾又復日亟、而地方已幸無事、且蒙朝廷曾有賊平來説之旨。若再拘縛、使不獲一申其情、後雖萬死、無以贖其痛恨矣。老先生（王瓊）亦何惜一擧手投足之勞、而不以曲全之乎。今生已移疾舟次、若復候命不至、斷亦逃歸、死無所憾。老先生亦何惜一擧手投足之勞、而必欲置之有罪之地乎。（「上晉溪司馬」二、『外集』三）

とうとう祖母に會うことができず、「終天の痛」を抱くことになった陽明は、今度は父親も祖母の場合のように、取り返しのつかないことになるのではないかと危惧しているように見える。そのため、點線部にあるように、老先生はどうして一擧手一投足の勞を惜しんで自分を追い詰めるのか、と繰り返して王瓊に懇願したのである。

ところで、このような朝廷の重臣への懇願には、どのような返事が來るのであろうか。王瓊ではないが、王瓊より地位が上である内閣員の毛紀からの返書が殘っており、そこでは次のように言う。

地方大變、旋就底平、可謂一代之殊勳矣。……執事雅德撝謙、乃置而不居、顧以私爲請、恐非所宜也、亦非天下之所望於執事者也。（「答王陽明書」、『鼇峰類稿』十八）

傍線部にあるように、陽明の懇願を「私」と決めつけて拒否したのである。この書簡は内容からして十五年前半のものと

思われるが、その年の閏八月に奉った歸郷の上奏文では、陽明はあたかもこの返書を意識しているかのように、

臣之歸省父疾、在朝廷視之、則一人之私情、自臣身言之、則一生之大節。（「四乞省葬疏」、『別錄』五）

と、朝廷から見れば、自分の願いは一人の「私情」であろうが、自分からすれば、一生の「大節」ですらあると主張する。ここでは、人から「私」とされるものが、陽明によって「節」と意味づけられている。「私」と「節」の境界線はどこにあるのか。恐らく「私」になくて「節」にあるものは、全うされるべき倫理的價値ではなかろうか。しかも、それが「一生の大節」とされているように、陽明の人生全體にかかわるほど重い倫理的價値なのである。とすれば、陽明の思歸も、そのような重い倫理的價値が全うされずに缺如した狀態を回復しようとする衝動として理解できよう。

(3) 仕官と思歸

さらに、そのような思歸には、陽明が置かれた官界での難局も絡まっていた。そのうち特に問題となるのは、やはり「致良知」形成の契機と言われてきた張忠・許泰の變である。ただ、この事件に關しては、實は現在のところ、その詳細を示す一次資料が見つかっていない。從來の研究では、『年譜』や『明史』など後の編纂資料によって語られてきたが、それだけでは、信憑性ばかりでなく、具體性にもおのずと限界がある。ここで筆者も新しい資料を提示できるわけではないが、陽明自身の從來看過されてきた文章を一つ取り上げることによって、恐らく事件の生々しい一面が浮かんでくるのではないかと考える。

『王文成公全書』卷三十一に「行江西按察司審問通賊罪犯牌」という公文書がある。日付は六月十五日であり、その閏東本における配列などからすると、恐らく十六年の六月十五日、つまり陽明が江西を去る直前の文章である。そこでは次のように言う。

照得本院（陽明）於正德十四年六月內、因寧王謀反、起兵征剿、具本奏聞。當差贛州衞舍人王鼐齎奏、却乃設計詐病、推托不前、顯有通賊情弊。及至擒獲逆賊、差齎緊關題本赴京奏報、却又迂道私赴太監張忠處、捏報軍中事情、幾至釀成大變、及將原領題本通同邀截回還。所據本犯、罪難輕貸。……

王鼐という人が、宸濠の亂の時、陽明から謀反の報告を北京に屆けるように托されたが、言い譯をしてそれを拒んだ。

そして、反亂の平定後、また緊要な上奏文を屆けるように托されたが、今度は宦官の張忠のところに寄り、陽明のことをでっち上げて讒言した。しかも、それがもとで大きな災難が降りかかってくるところであったという。つまり、陽明の配下にいる者が、張忠の前で陽明を陷れようとしたのであるが、これはいつのことであろうか。鍵となるのは、陽明が王鼐に托した「緊關題本」であるが、『全書』を調べたところ、彼に托したと明記された上奏文はただ一つ、原文は現存しないが引用として殘っている「三乞省葬疏」（假題）である。それを大幅に引用した「四乞省葬疏」（『別錄』五）によれば、この上奏文は正德十五年三月二十五日に王鼐に托したものであり、宸濠の亂以來、歸鄉を願う三回目の上奏文である。ただ、この上奏文は自身の歸鄉についての請願であり、公務用の「題本」ではない可能性もあるが、實は、その日に王鼐に托した上奏文がもう一通あるようで、それは同じ日付を持つ「乞寬免稅糧急救民困以弭災變疏」（同上）である。これは民のために租稅の免除を願ったものであり、「題本」に違いないから、陽明の言う「緊關題本」もこの上奏文のことと思われる。とすれば、十五年の三月下旬、陽明が當時の重要事であった自身の歸鄉と民の租稅に關する二つの上奏文を配下の王鼐に托して北京に屆けさせたが、しかし王鼐が南京にいた張忠のところに寄って陽明を讒言し、それで災いが陽明の身に及んできそうになった、ということがこの資料から窺えよう。三月下旬の時點で、陽明の配下にこのような裏切者がいたこと、そして裏切者の讒言を利用して張忠が災難をもたらしそうになったこと、これらが當時の陽明が置かれた狀況の危うさを示していよう。

さて、張忠らがもたらしそうになった災難とは、具體的にどのようなものであろうか。これについては、例えば弟子の王畿が傳えた陽明の言葉に、「吾所遭謗、搆以黨逆無將之惡名、蒙以滅族無辜之隱禍」（「先師畫像記後語」、『龍溪王先生全集』十五）とある。つまり、陽明が宸濠の亂を平定したにもかかわらず、逆に宸濠の謀反に荷擔したなどという讒言を蒙って、甚だしくは大逆の罪で一族がこぞって處刑されるという危險にさらされていたことである。これでは、自分だけでなく父親の命まで脅かされることになる。自分が無實の罪で捕らえられるなら、父親を悲しませてしまう。さらに父親まで卷き込むなら、子としての罪はなお重い。もともと父親の病にも歸れないために、陽明の重んずる倫理的價値は缺如していたが、今度は官界での危險も加わり、その倫理的價値が脅かさ

れる状態にさえなった。そうしたなか、官界から離れて歸郷することは、その脅かされた倫理的價値を回復する意味をも持つ。その意味でも陽明は歸るべきであった。

十五年の前半は正德帝が南京に滯在していた。一月末頃、側近の張忠らに煽られ、正德帝は陽明に謀反の意志があるかどうかを試すために、彼を南京まで呼んだ。結局、陽明は南京の外で阻まれて正德帝にまみえることができなかったが、その時のエピソードが『年譜』に以下のように傳えられている。

先生赴召至上新河、爲諸幸讒阻不得見。中夜默坐、見水波拍岸、汨汨有聲。思曰、「以一身蒙謗、死卽死耳、如老親何。」謂門人曰、「此時若有一孔可以竊父而逃、吾亦終身長往不悔矣。」（四十九歳一月）

讒言を一身に浴びて危機にあった陽明は、自分は死ねば死ぬまでのことであるが、ただ父親に災いを及ぼすことだけは、どうしても納得できなかった。そこで、もし穴でも一つあるとしたら、『孟子』盡心上にある舜が罪を犯した父親を背負って逃げる話のように、父親をともなって一生世を逃れたい、という思いも浮かんできたという。

南京から江西に戻る際、陽明は途中の山々に登り、この危機における鬱屈した心情を詩作に托している。銅陵で仙人が殘したといわれる鐵船を見た時、陽明は「由來風波平地惡、縱有鐵船還未牢」と世間は平地でも波風が荒いことを嘆き、「我欲乘之訪蓬島、雷師鼓舵虹爲纜」（「舟過銅陵（中略）因題石上」[10]、『外集』二）と道教の仙境に逃れたい思いを語る。九華山に滯在した時には、「莫謂中丞喜忘世、前途風浪苦難行」（「重遊化城寺二首」、同上）と、行く手に待ち構えている波風が本當に辛いものであるという心情も表わしている。

江西に戻ったのは、三月下旬に差しかかる頃であるが、それから陽明は先の王鼎に托した二つの上奏文を奉り、それとともに中央の重臣や友人にも書簡を寄せていた。そのうち弟子の朱節への書簡で、陽明は次のように言う。

欲投劾往去、慮且禍出不測、益重老父之憂。不去、卽心事已亂、不復可强留。神志恍恍、終日如夢寐中。省葬之乞、去秋嘗已得旨、「賊平來說」。及冬底復請、而吏部至今不爲一覆、豈必欲置人於死地、然後已耶。僕之困苦危疑、當道計亦聞之、略不爲一動心、何也。望守忠與諸公相見、爲我備言此情、得早一日歸、卽如早出一日火坑、卽受諸公更生之賜矣。至禱至禱。[11]

一家の命が危險にさらされ、倫理的價値も脅かされているな

か、陽明が何よりも望んだのは、やはり歸鄕することであった。ここで、吏部が自分の要求を無視しその苦境に無理解であったことに對して、自分を「死地」に追い込むこととして憤慨し、また今の狀況は「火坑」（火の燃え盛る穴）のようなものとして、そこから一日も早く脫出させてくれるように朝廷の重臣への說得を朱節に賴んでいた。これらの激しい言葉から、我々は陽明がこの危機に壓倒されているような姿さえ讀み取れる。その狀態なら、倫理的價値を回復するよりも、單に危難を避けて安全を確保したいという思いも思歸の理由になりうる。要するに、もともとあった陽明の思歸が、官界における危機的狀況にともない、倫理的價値を回復する面からも、自身の安全を確保する面からも增幅されていったように考えられる。そして、それと同時に、巡撫としての陽明の職務も大きな難局を迎えていた。

當時、十四年から十五年にかけて江西では旱魃、反亂、親征軍の橫行、さらに大洪水に相次いで見舞われたため、民は困窮を極めていた。そのため、陽明はかねて民に租稅の免除を約束し奏請もしていたが、返事はいっこうになかった。幸い、江西の事情を察した南京の官僚が申請して許可を得たので、十五年の三月末に待望の租稅免除許可が下りた。ところが、許可が下りても、戶部など朝廷の機構はなお租稅の徵收を止めなかった。しかも、徵收命令の嚴しさは日に日に增していった。困窮して租稅を納める餘力のない民と、許可に反して徵收しようとする朝廷との間に挾まれて、地方の最高長官としての陽明はどうすべきであったのか。

部下から意見を聞かれた陽明は、その返答の公文書の中で、

嗚呼。目擊貧民之疾苦而不能救、坐視徵求之急迫而不能止、徒切痛楚之懷、曾無拯援之術、傷心慘目、汗背赧顏、此皆本院之罪、其亦將誰歸咎。（「批追徵錢糧呈」、『別錄』九）

と痛烈に叫んだ。民の悲慘なありさまを目の當たりにしつつも、國家の理不盡な取り立てを止めることができない。その後ろめたさから、陽明はまず自分の俸給を止めることにして（「再批追徵錢糧呈」、同上）、それから自分を彈劾する上奏文を奉った（「水災自劾疏」、『別錄』五）。ほかに租稅の免除あるいは代替策なども奏請したが、やはり返事はなかった。一方、部下に對する指示としては、あくまで民を思いやりながら次第に徵收することにし、最終的には「務使窮民不致重傷、而國用終亦無損」（「批南昌府追徵錢糧呈」、『別錄』九）と、民を深く傷つけないように國家の命令を全うするという解決を目指した。

この解決策は、民と國家の両方を全うする調停策と言えるが、見方を變えれば、それは両方を滿足させないことでもある。巡撫としては、治下の民が困窮していれば、それを救濟するのが當然の責任であるが、陽明は救濟するどころか、結局民からさらに取り立てることになった。一方の國家でも、徵收が遅れたことに對して、徵收に當たった役人を罰しようとする動きが出ていた。自分を罰するのではなく、自分の指示で實際の徵收に當たった部下たちを罰するわけであるから、陽明は心苦しく思い、すべてを一身に引き受けて免職されることを願い出た（「徵收秋糧稽遲待罪疏」、『別錄』五）。こうして見ると、官界の危機と同時期に、職務上の難局に對しても、陽明は「地方事決知無能爲、已閉門息念、袖手待盡矣」（「與王晉溪司馬」十一、『續編』二）と言うように、一種の無力感を抱いていたように思われる。そして、その無力感もまた陽明の思歸を增幅させていたと考えられる。

（4）志と思歸

最後に、本節冒頭に述べた兩氏の論考が指摘するように、弟子と講學して道を明らかにするという志も、陽明の思歸に込められていた。宸濠の亂が起こる以前の十三年の末頃、日々の職務に追われて講學に專念できない自分について、陽明は次のように言っている。

> 此間朋友亦集、亦頗有奮起者。但惟鄙人冗疾相仍、精氣日耗、兼之淹滯風塵中、未遂脫屣林下、相與專心講習。正如俳優場中奏雅、縱復音調盡協、終不免於劇戲耳。（「與顧惟賢」六、『續編』二）

傍線部にあるように、日々の職務をこなしている自分を役者にたとえ、いくらうまく演奏していても、結局は演技にすぎないとしているのである。「演技」というものの特徵はどこにあるのか。恐らく演じていることと役者自身との乖離にあると考えられる。とすれば、陽明は日々その場その場の必要性に合わせて職務をこなしているが、それも結局は、その場の必要性に迫られているに過ぎず、陽明自身の希望とは何の關わりもないことになる。もちろん、必要性に應じて物事に對處すること自體に、ある種の價値も認められるが、しかし、それはその場限りの價値であり、陽明が本來追求しようと考えていた價値ではない。しかも、日常に追われている自分を「役者」と捉えているところに、本來考えていた價値を追求できない現狀に對する一種の物足りなさや焦燥感を持っていたことも讀み取れよう。そこで、陽明は「脫屣林下、相與專

心講習」すなわち職務から解放されて故郷の山に歸り、弟子との講學に專念することを限りなく望んだのである。

ここまでの檢討を通して、江西時代における陽明の强烈な思歸には、様々な要素が確認できた。まず自己の面では、次第に惡化する病、官界の危機に際して安全を確保したい欲求、職務の難局に對する無力さや後ろめたさなどがある。次に倫理の面では、病に伏している父親のために歸って看病したいという思いや、危機に際して災いを遠ざけて父親を安心させたいという思いなどがあるが、それは言い換えれば、陽明が重んずる倫理的價値が缺如し、さらに脅かされもする狀態を回復しようとすることでもある。以上のほかに、陽明が自分の使命のようにしていた講學の志も、思歸の中に込められていたと考えられる。このような種々の要素が合わさって陽明の强烈な思歸となっていたのであるが、しかし結局、次の嘉靖帝が卽位するまで、歸鄕の許可は得られなかった。そうしたなか、歸鄕への渴望を胸に抱きながら、陽明は普段の物事への對處をどう行えばよかったのか。また、それが「致良知」の形成とどう關連したのか。次にそれらについて檢討してみたい。

三、歸れない中での陽明の對處

先に述べたように、自分は役者のように振る舞っていると言った陽明は、具體的にどう振る舞っていたのか。例えば、山賊討伐の最後の一戰である浰頭の戰いに際し、陽明は早く切り上げて歸鄕しようと考えていたのであるが、結局、それを遲らせて二ヶ月も前線に駐留することになった。そのわけを陽明は次のように語る。

故今三省連累之賊、非殺之爲難、而處之爲難、非處之爲難、而處之者能久於其道之爲難也。賤軀以多病之故、日夜冀了此塞責而去、不欲復以其罪累後來之人、故猶不免於意必之私、未忍一日舍置。嗟乎、「我躬不閱、遑恤我後」。盡其力之所能爲、今大勢亦幸底定、如其禮樂、以俟君子而已。（「與顧惟賢」三、『續編』二）

つまり、戰爭後の長い安定をはかり、後任に災いの種を殘さないために、あえて長く駐留することにしたのである。それは、先ほど述べたような目の前の必要性に迫られて取った行動であり、そのような對處には「長い安定をはかる」という價値も含まれていようが、それは陽明が山賊討伐という事に當たって初めて生じた價値であり、もとから陽明の心にあっ

たものではない。そのため、もとからあった講學などの價値と照らし合わせてみれば、先ほど見た「役者」のような感覺が起こってくるのである。講學だけではなく、祖母や父親への孝養ないしは巡撫としての責任なども、陽明が江西に來る前から觀念の中に持っていた價値であり、それが江西時代という現實において陽明と切り離されると、演じていることが自分自身のことではないという役者感覺を陽明に起こさせたのである。

十四年六月、宸濠の亂が起こり、陽明は福建へ赴任する途中でそれに遭遇した。もともと陽明は、福建での臨時の仕事が終わったら、そこから直接故郷に歸ろうと考えていたが、反亂に遭遇すると、毅然として義兵を擧げてそれに立ち向かうことにした。その理由について、陽明は次のように言う。

本非生（陽明）之責任、但闔省無一官見在、人情渙散、洶洶震搖。使無一人牽制其間、彼得安意順流而下、萬一南都無備、將必失守。……彼之奸計漸成、破之難矣。（「與當道書」、『續編』二）

つまり、省級の官僚がことごとく宸濠に捕らえられまたは殺されていたなか、どうしても誰か一人が宸濠を牽制し、その襲撃を遅らせる必要があったため、當時南贛提督であった陽明が、あえて殘ることにしたのである。そう判斷した陽明が父親に送った書簡があり、そこに次のように言う。

男（陽明）之欲歸已非一日、急急圖此已兩年、今竟陷身於難。人臣之義至此、豈復容苟逃幸脫。惟俟命師之至、然後敢申前懇、俟事勢稍定、然後敢決意馳歸爾。伏望大人陪萬保愛、諸弟必能勉盡孝養、旦暮切勿以不孝男爲念。天苟憫男一念血誠、得全首領歸拜膝下、當必有日矣。（「三上海翁書」、『續編』一）

二年も汲汲として歸郷を求めてきたにもかかわらず、かえって國難に陥ってしまった。そうなった以上、人臣の義としてここを逃れるわけにはいかない。そのため、從來求めていた歸郷は國難の後に回し、天がもし自分の誠を認めてくれるなら、生きて歸る日は必ず訪れる、とその成就を天に任せるしかなかったのである。しかし、そのように國難に立ち向かうには、どれほどの感情を抑える必要があったであろうか。それについては、例えば次の資料がその一端を示している。

老父因聞變驚憂成疾、妻奴皆坐此病留吉安、至今生死未定。始以國難、不暇顧此。今事勢稍靖、念之百憂煎集、恨不能卽時逃去。奈何奈何。[12]

國難が過ぎたあと、抑えていた父親や妻子に對する想いが一

氣に溢れ出て、陽明の心を責め苛み、逃げ歸る思いをも起こさせたという。

このように、目の前に國難という事が差し迫ると、陽明は二年も汲汲として求めてきた歸郷をわきに置き、さらに多大な感情を抑え込んでその事に對處しようとした。ということは、その時に限ってはこの事への對處に、歸郷に含まれた倫理的價値よりも重い價値があったと言わざるを得ない。しかし、そのようなはずはない。價値の重さでは、親への一日の孝養はほかの何物にも代え難い最高の價値であり、その認識こそ「內外輕重」の違いをわきまえると陽明は言う（「送德聲叔父歸姚」序、『外集』二）。にもかかわらず、このような現象が起こるのはなぜか。それは恐らく、現實において價値の選擇をする時には、その重さだけでなく、その距離をも考慮に入れるものだからである、と考えられる。歸郷に含まれた倫理的價値は、歸郷して初めて全うされるものであり、そうするには皇帝に申請して許可され、さらには實際に歸ることを含め、最低でも數ヶ月はかかる。そのため、より遠い價値と言える。それに對して、國難に對處することは、それ自體臣下にとって相當に重い價値であるうえに、目の前の必要性に迫られて目の前で實行できる身近な價値でもある。そこで、重さと距離の兩方を考え合わせた結果、國難への對處の重要性が、歸郷の倫理的價値を超えていたように考えられる。そうすれば、原理的に重い價値のほかに、現實的に身近な價値も陽明にとって相當重要なものであったと言うことができる。國難は一種の非常事態であるが、普段の場合では、この原理的に重い價値と現實的に身近な價値との相剋を、陽明はどう判斷するのであろうか。

先述のように、宸濠の亂以後、陽明は官界で危機に遭い、特に十五年の三月頃は非常に危險な狀況に置かれていた。そうしたなか、脅かされた倫理的價値を回復するためにも、自身の安全を確保するためにも、陽明は限りなく歸郷を望むようになるが、實は當時の政治的混亂のもと、歸郷を望んだのは陽明だけでなく、その部下にも苦しさに堪えきれず辭表を提出する人が相次いでいた。四月、宸濠に對する戰爭で先頭に立った按察使の伍文定が病を理由に辭職し、七月、撫州府の同知（次官）である汪嵩や、江西全省の教育を管理する提學官の邵鋭も辭職を申し出たが、自分と同じ願いを持つ彼らに對して、陽明はその立場を思いやりつつ、なるべく引き止めようとした（「批按察使伍文定患病呈」「批撫州府同知汪嵩乞休呈」「批提學僉事邵鋭乞休呈」、『別錄』九、日付は閭東本）。そのうち

邵鋭に對して、陽明は特に感情のこもった返答をしている。

況本院（陽明）自欲求退而未能、安可沮人之求退。仰該司（按察司）備行本官（邵鋭）再加酌量、於去就之間、務求盡合於天理之至。必欲全身遠害、則掛冠東門、亦遂聽行所志。若猶眷顧宗國、未忍割情獨往、且可見危受命、同舟共艱、稍須弘濟、却遂初心、則臨難之義、既無苟免於搶攘之日、而恬退之節、自可求伸於事定之餘。興言及此、中心愴切。

邵鋭とは、『年譜』に「守舊學相疑」（四十九歳九月）とあるように、後に學問に關して從來の立場を堅持し、陽明を疑った人である。その彼に對しても、陽明は結局、自分で「天理の至り」を求めるように促しただけであった。「天理の至り」を求めたうえでなお歸りたいならそれも認めるが、もし國のことが氣がかりであって一人で逃げるに忍びないなら、今一つ踏ん張ることで「臨難の義」は果たせるし、事が收まった後に「恬退の節」もおのずと全うできる、としたのである。そして最後の「興言及此、中心愴切」からは、ここまで說得してきた陽明の言葉が、陽明自身にも響いたように思われるが、ということは、彼は邵鋭と同じくあるいは邵鋭以上に歸るべき事情を抱えていながら、それ以上に目の前の情勢から、もうしばらく止まっておく必要性を感じていた、ということであろう。

苦しいながらも、陽明はもうしばらく止まることを選び、歸ろうとする部下に對しても說得して思い止まらせたのであるが、それは最も重い倫理的價値が全うされず、脅かされもする狀況を一方に抱えながら、それとは逆の目の前の身近な價値を選んだことを意味する。つまり、原理的に重い價値と現實的に身近な價値との相剋に對して、陽明は身近な價値を優先したのである。この身近な價値を優先することは、陽明の工夫論からすれば當然の歸結かもしれないが、ただ先ほど講學などの從來の價値を放置して目の前の事に追われる自分を「役者」と捉えているのと比べれば、その間に大きな姿勢の變化があるようにも思われる。つまり、やむを得ず原理的に重い價値を放置して身近な價値を全うしながら、それに物足りなさを感じる狀態から、みずから進んで身近な價値を取ってそれに專念することに變わったのである。それでは、このような姿勢の變化はどこから生まれたのであろうか。

邵鋭に返答を出すのは七月下旬のことであるが、實は先の六月から、陽明は南昌から贛州に來ていた。なぜ來たかというと、明確な資料的根據はないが、當時の狀況からして、正

徳帝を惑わしていた江彬の簒奪に備えるためであった可能性が最も大きい。當時、正德帝は側近の佞倖たちに惑わされ、南京で遊び明け暮れていたが、そのうち特に江彬が正德帝の寵愛を得て權勢をほしいままにし、陰で簒奪の企ても持っていたという。[13] そうしたなか、陽明がかつての本據地である贛州に行き、そこで軍備を整えていれば、江彬への牽制にもなるし、萬一江彬が謀反を起こしても、すぐに驅けつけて抑えることもできる。ただ、このような行動に出ることは、いわば國家の惡勢力に眞っ向から對立することになり、從來考えていたように歸鄕して災いを遠ざけるどころか、むしろみずから災いの中に飛び込んでいくようにも見えるのである。

ところで、このような姿勢を取るとともに、贛州に來てからの陽明は有名な「啾啾吟」（『外集』二）を作った。そこで「丈夫落落掀天地、豈顧束縛如窮囚」、「人生達命自灑落、憂讒避毀徒啾啾」などと言っているところが、いかなる境遇をも恐れない達觀した心境を表わしている。また、「啾啾吟」と似た心境を表わすものに、次の詩作もある。

莫怪鄕思日夜深、干戈衰病兩相侵。
孤腸自信終如鐵、衆口從敎盡鑠金。
碧水丹山曾舊約、青天白日是知心。
茅茨歲晚饒風景、雲滿淸溪雪滿岑。

（「用韻答伍汝眞」、同上）

「孤腸自信終如鐵」などの傍線部は、いかに讒言を浴びていようと、自分の精神はそれに搖るがされないという自信を示し、また「青天白日是知心」は、自分の心はまるで青天白日のようなものだと、自己の心の狀態に對する自信を語っている。このいわば外界と自己の心の兩方に對する滿ち溢れた自信は、三月頃の「豈必欲置人於死地、然後已耶」「得早一日歸、卽如早出一日火坑」と對比すれば、その大きな差に氣付く。當初は官界での危機に壓倒されそうな樣子さえ見せた陽明は、どのようにしてこの心境の大きな變化を實現したのであろうか。また、六月から九月にかけての贛州滯在期に、實は「致良知」說も唱えられるようになったのであるが、この心境の變化は「致良知」の形成にも結びついていたのではなかろうか。

後年、讒言の危機に對處した經驗について、陽明は次のように言及している。

昔人有言「何以止謗。曰、無辯。」人之是非毀譽、如水之濕、如火之熱、久之必見、豈能終掩其實者。……故二君今日之事、惟宜安靜自處、以聽其來、順受之而已。……二君

但看數年來、區區所以自處者如何。當時若不自修自耐、但一開口與人辯、則其擠排戮辱之禍、將必四面而立至、寧獨數倍於今日而已乎。（「答伍汝眞僉憲」、閻東本『文錄』三）

書簡の相手は伍希儒、文中の「二君」は彼と謝源であるが、二人とも宸濠に對する戰爭で御史として陽明を助け、後に第一等功の筆頭に擧げられた人物である（「咨整理兵馬糧草兵部左侍郎王查報功次」、閻東本『別錄』十一）。ところが、二人の功績は朝廷に認められず、かえって理由を付けて左遷されている。そこで陽明は、王通『中說』（卷五問易篇）にある「何以止謗。曰、無辯。」という語を引き、人から何をされてもそれに反撥せず、その來るがままを受け入れることを勸めた。また、自分の經驗として、ただ「自修自耐」すなわちひたすら耐えながら自分を修めることで「當時」を乘り越えたことを言っている。後文の「當時諸君從傍靜觀其勢」からして、この「當時」は「二君」と一緒に過ごしたときであるから、宸濠の亂以後の嚴しい時期と思われる。ということは、當時の危機に際しても、陽明は決して反撥せず、人から何をされてもそれをそのまま受け入れ、その中で耐えながら自分を修めていくことで乘り越えてきたのである。

人から何をされてもそのまま受け入れ、ひたすら耐えるという態度は、ある意味で極めて受動的と言える。しかし、陽明からすれば、

或問客氣。師曰、「客與主對。讓盡所對之賓、而安心居於卑末、又能盡心盡力供養諸賓、賓有失錯又能包容、此主氣也。惟恐人加於吾之上、惟恐人怠慢我、此是客氣。」（『稽山承語』29條）

というように、その一見受動的な態度こそが「主氣」であり、否定すべき「客氣」と對照的なものであった。「客氣」については、陽明はしばしばその弊害を言う。例えば「私欲客氣、一病兩痛、非二物也」（「答陸原靜書」二、『傳習錄』中）と、客氣と私欲は一物の兩面であることを言い、「只恐客氣爲患、不肯實致其良知耳」（「與楊仕鳴」二、『文錄』二）と、客氣が致良知の工夫を妨げる恐れがあることを主張している。これらの用例から、必ずしも客氣の一貫した定義が讀み取れるわけではないが、少なくともここでは、それを主人と客人の關係で說明しようとしている。

すなわち、主氣とは、主人が客人をもてなすように、自分を低くして客人の一切を受け入れ、そのうえで客人をできるだけよくもてなそうとする心持ちである。それに對して客氣とは、客人のようによくもてなされることを期待し、よくさ

れないことを怖がる心持ちである。比喩的な話であるが、言い換えれば、主氣は人から何をされようと、その人の一切を受け入れ、そのうえで人によくしようとすることであり、それに對して客氣は自分が人に受け入れられ、よくされることを期待し、人によくされないのを嫌がることである。その客氣のもとに、いったん人によくされなかったら、不滿を抱いて反撥や逃避などしたくなることも、當然豫想されよう。

伍希儒と謝源の例で言えば、理不盡な仕打ちをされてそれに反撥しようとすることは、陽明からすれば、まさに客氣なのであり、だからこそ陽明はその來るがままを受け入れるという主氣に徹することを勸めたのである。また、陽明自身が危機に際して世間から逃れようとしたり、自分の要求を握り潰す吏部を批判したりしたのも、實は客氣なのであろうが、彼はやはり、その仕打ちをそのまま受け入れたうえで人々によくしようとすること、すなわち「主氣に徹する」ことで危機を乘り越え、かつ心境にも大きな變化がもたらされたと考えられる。つまり、人から何をされるか心配するよりも、むしろ何をされてもそれを受け入れ、そのうえで人によくしようとすること。そう切り替えることで、何事があっても素直に受け入れる、ゆったりした心構えも自然に生じてくるように思われる。その心構えのもとに、先に見た原理的に重い價値の缺如に對する焦燥感や、身近な價値しか全うできないことに對する物足りなさが消え、目の前に何事が來てもそれを受け入れ、融通無碍に對處できるようになる。こうして先の價値の相剋が自然に解消され、物事に對する姿勢も大きな變化を見せたのである。「致良知」が形成される背後には、まさにこのように主氣に徹することで生じた、自己の心境と物事への姿勢にわたる一連の變化があったと考えられるのである。

八月、陽明は弟子を訪ねに贛州近くの山に出かけた。そこで次の詩作を殘した。

青山隨地佳、豈必故園好。但得此身閑、塵寰亦蓬島。(14)

まだ歸郷は叶わず、俗世から離れることもできないが、それはもう素直に受け入れられてゆったりした心境になったようである。

四、むすび

龍場の大悟は、外界に對する倫理的意識に專念することによって生死の難關を乘り越えることであったと言われる。(15) それに對し、江西時代で問題となっていたのは、生死だけでな

く、生死より重い價値でもあった。その場合、倫理的意識に専念するといっても、もとから重んじていた倫理的價値を回復するか、目の前の身近な價値に集中するか、道が二つに分かれている。倫理的價値を回復することは、現實的に難しい。かといって、それをあきらめて身近な價値に集中するなら、陽明の價値觀としては許されない。陽明は兩者の拮抗に惱まされたが、最終的には官界で危機に遭い、そこで主氣に徹するという處し方を取り、何もかも素直に受け入れるゆったりした心構えを身に付けたことによって解決を見たのである。その結果、陽明は目の前の身近な價値を優先することに納得したが、そのことが陽明の工夫である一方、みずからをそう納得させた陽明の心境の變化が、すなわち江西時代における陽明の思想的成熟であったと考えられる。

注

(1) 安田二郎「陽明學の性格」(『中國近世思想研究』弘文堂、一九四八、一八六頁)。

(2) 「致良知」の形成時期については、ふつう正德十五年の秋に贛州で唱え始めたとされる。山下龍二「王陽明の思想の變遷について」(『日本中國學會報』第十集、一九五八)、陳來『有無之境―王陽明哲學的精神』(人民出版社、一九九一)第七章第一節「致良知說的提出」。

(3) 例えば、岡田武彥『王陽明大傳』五(『岡田武彥全集』5、明德出版社、二〇〇五、十一頁)は、この見方を示している。

(4) 例を擧げれば、陽明が尊敬する景泰朝の英雄である于謙も、山西巡撫の任にあったとき、「銜命年年巡塞北、思親夜夜夢江南」(「示冕」、『忠肅集』十一)と毎晩江南を夢見るほど故郷が戀しかったという。于謙の出身は浙江の杭州である。

(5) 余英時『宋明理學與政治文化』(吉林出版集團有限責任公司、二〇〇八)第六章「明代理學與政治文化發微」。

(6) 計文淵編『王陽明法書集』(西泠印社、一九九六)所收の圖版「二六　寓贛州上海日翁手札」。なお、本論は書跡を引用するに當たっては、圖版から直接引くことを原則としたため、文字や句讀は圖版に付された釋文とは必ずしも一致しない。

(7) 注(6)所引書「六〇　與薛尙謙手札」。

(8) 役所の見取り圖は嘉靖『贛州府志』の圖版「提督都察院圖」に、沿革などは卷六公署「提督都察院」に見られる。

(9) この文章の拓本に、「正德己卯(十四年)三月既望」の日付があるという(「王陽明『思歸軒賦』書迹歸鄉記」『寧波日報』二〇一二年三月二十日)。『全書』ではこの文章を庚辰(十五年)の作とするが、誤りである。

(10) この詩の書跡は何海林編『王陽明書銅陵觀鐵船錄寄』(上

海辭書出版社、二〇一〇）。そこには「正德庚辰春分（十五年二月二十四日）」の日付がある。

（11）注（6）所引書「三三　與朱守忠手札三通」三。

（12）注（6）所引書「三三　與朱守忠手札三通」一。

（13）江彬は嘉靖帝の卽位後、凌遲で處刑された。當時の刑部による審問の記錄が、謝蕡『後鑑錄』（『明史資料叢刊』第一輯、江蘇人民出版社、一九八一）に殘っている。

（14）注（6）所引書「四〇　忘歸巖題壁」に「正德庚辰（十五年）八月八日」の日付がある。

（15）大場一央「王陽明の思想形成における龍場大悟の位置」（『早稻田大學文學研究科紀要』五二、第一分冊、二〇〇六）。

〈キーワード〉王陽明、望鄕、江西、致良知、出處進退